

セネガルの宗教事情

在セネガル日本国大使館

セネガルにおいては、全人口の96%がイスラム教徒であり、その他の宗教としては、3.6%がキリスト教を、0.3%が伝統宗教をそれぞれ信仰していると言われています。しかしながら、セネガルの政府や人々は、少数宗教であるキリスト教徒に対しても寛容であり、国内において宗教対立は見られません。

たとえば、祝日の設定について見てみると、一年に14日あるセネガルの祝日のうち、6日間はキリスト教関連の祝日です。これらの祝日は1974年の法律で定められたものですが、その背景には、当時のレオポール・セダール・サンゴール初代大統領がカトリック教徒であったこと、また、各々の信教の自由を尊重すべきという思想を持っていたことが挙げられます。

現在、この思想は国民に深く根付いており、イスラム教の祭りにはキリスト教徒を、キリスト教の祭りにはイスラム教徒を呼んで共に祝う習慣があります。

また、セネガルのイスラム教は穏健であり、それぞれのイスラム教団体間が良好な関係を有していることでも知られています。女性の服装なども比較的自由であり、スーフィズム（イスラム神秘主義）の影響により、アッラーと個々の信徒を仲介する宗教指導者（マラブー）が崇拜され、マラブーの写真や肖像を飾ることが許容されています。マラブーの存在はセネガル国民の日常生活と深く結びついています。

セネガルのイスラム教徒のうち、約95%が、四大教団（ティジャーーン教団、ムリッド教団、ライエン教団、カディーリー教団）のいずれかに属すると言われています。これら四大教団の行事の際には、必ず大統領が閣僚を伴って総カリフ（最高指導者）への表敬に訪れるほど、イスラム教団はセネガル社会において重要な存在になっています。



当館のレセプションに参加した四大教団関係者